

症 例

癌多発家系の兄弟に発生した若年者胃癌

愛知医科大学第1外科

小池 明彦 日比野清康 加藤 健一
金光 泰石 山本 貞博

JUVENILE GASTRIC CANCERS IN TWO BROTHERS OF A CANCER FAMILY

Akihiko KOIKE, Kiyoyasu HIBINO, Kenichi KATO,

Taiseiki KANEMITSU and Sadahiro YAMAMOTO

Department of Surgery, Aichi Medical University

索引用語：癌多発家系，若年者胃癌，兄弟内癌発生

はじめに

わが国の胃癌死亡率は，昭和30年代を頂点として漸次減少が指摘されているが¹⁾，年齢別にみると若年者層では全般的な漸減の趨勢とは逆に増加傾向を示している²⁾。

若年者胃癌の胃癌全体に占める頻度は3~5%で高率ではないが，一般に高い家族内癌発生率を示す傾向があるとされている³⁾⁴⁾。

Lynch ら⁵⁾は，種々の器官の癌が多発した家系を見出し，その癌に罹りやすい性質が Mendel の優性遺伝の様式をとる“Cancer family syndrome”なる一独立疾患単位を確立したが，若年者癌はその症候群の重要な一特徴とされているのである。かような事実から，若年者癌をみたときには家族内癌発生についての調査が必要と考えられる。

私どもは最近兄弟に発生した若年者胃癌を経験し，これを発端として胃癌の多発一家系を調査し得たので，これらの症例報告と，その家族内の胃癌発生状況について記載し，文献的考察を加えた。

症例1. 17歳男，調理師見習

既往歴：片側唇裂形成術（生後40日）

現病歴：昭和49年2月初診，1年前から毎月1回程の頻度で上腹痛を生じ，その都度2~3日仕事を止め休養して来た。この上腹痛は約1カ月前から強度を増して持続性となり，とくに空腹時に著しく，嘔気を伴うに至った。体重は6カ月間に7kg 減少した。

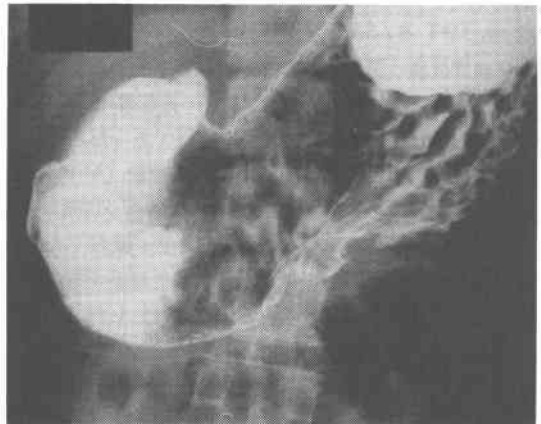
現症：体格中等（身長160cm，体重48.5kg），栄養状態は可，眼瞼結膜に貧血を認めた。上口唇に唇裂形成術の線状瘢痕を認めた。

腹部所見では上腹部に軽度の圧痛，抵抗があったが，腫瘤は触知し得なかった。その他の身体各部には異常所見はなかった。

検査成績：血液検査で赤血球375万，血色素11.1gの貧血を認めた以外には，肝機能，腎機能 胸部X線写真，心電図などに異常を認めなかった。

胃X線検査所見：写真1（背臥位二重造影）の如く，胃体下部大弯側に底辺の幅が広い扁平な隆起性病変があり，その中央部には大きな深い潰瘍形成像を認めた。

写真1 症例1の胃X線写真



年後に再発し38歳で死亡した。曾祖母は62歳で胃癌で死亡している。

第一世代および直系の子孫を合わせて18名中胃癌患者8名(44.4%)と高率に発生しており、調査時にまだ幼少年齢の者もあり、今後さらに高率となる可能性も秘めている。

知り得た範囲での血液型は図に示したとおりでO型ないしA型である。

考 察

Warthin⁶⁾ は発癌部位のいかんを問わず、癌の多発する家系を cancer family と呼んだが、この家系はそれに相当するものである。また、Lynch⁹⁾ は同一家系の中で種々の器官に癌を発生し、しかも同一個人にしばしば重複癌が多発する傾向があり、かつその癌に罹りやすい性質が Mendel の優性遺伝をする家系を記載し癌家系症候群 Cancer family syndrome なる概念を提唱し、その後さらに同様な家系の追跡を検討して、この症候群を一独立疾患単位として確立するに至った。この症候群の特徴として大腸癌および子宮内臓癌の頻度が高い。私どもの症例の家系はすべて胃癌を生じており臓器特性の点では合致していない。また第二の特徴としての重複癌を生じた事実もなかった。さらに第三の特徴として若年者における癌の発生があげられているが、本症例の家系では癌発生年齢の若年者傾向が明瞭となっている。本家系では、Cancer family syndrome とは合致していないが、常染色体優性遺伝形式に属する発症を示している。遺伝様式を確かめるには、さらに長年月にわたっての追跡調査が必要であろう。この家系のように胃癌の多発した家系の報告⁷⁾ はみられるが兄弟に発生した若年者胃癌の報告は見当たらない。

栗田⁴⁾ は、複数癌家族歴のある若年者胃癌患者は、すべて血液型がA型であったと述べている。私どもの2症例はいずれもO型で、この報告の事実とは合致しない。血液型遺伝形式と若年者癌の関連を確立するには、統計的に有意な症例数を集積して検討する必要がある。

若年者胃癌の占居部位は胃底腺の存在する体部に多く発生しやすいとされている⁹⁾。その肉眼型および組織型についてみると、早期癌ではⅡc あるいはⅡc+Ⅲ、進行癌では Borrmann Ⅲ あるいはⅣ型で、未分化型の硬癌、粘液細胞癌が高頻度にみられる⁹⁾。私どもの2症例はともに若年者胃癌の特徴をもっており、組織型は極めて類似し、その進展様式も粘膜下層を平面的に進展する傾向が認められた。

若年者胃癌は一般に発見がくれ切除率が低く予後不良との報告⁹⁾¹⁰⁾がある。一方切除率、根治手術率に差がなく、遠隔成績もあまり悪くないとの報告¹¹⁾もある。私どもの2症例は切除は可能であったが、進行癌のため予後は不良であった。

本症例の家系の如き胃癌多発家系では、若年者癌の発生を考慮に入れて、若年期から定期的な検査を施行し、早期診断、治療を行うことが肝要である。

ま と め

17歳および23歳の兄弟に発生した胃癌を経験した。2症例ともに進行癌であったが切除可能であった。病巣はいずれも胃体部にあり、肉眼型は Borrmann Ⅲ型、組織学的には未分化癌が大部分を占めており、若年者胃癌の特徴をもっていた。

これら症例の家系を調査したところ、第一世代および直系の子孫を合わせて18名中8名(44%)に胃癌が発症していることが判明した。調査した限りでは、この症例の家系では胃癌のみで他癌の発生は確認されなかったが、Lynch の提唱した癌家系症候群との関連性について考察を加えた。

終わりに、病理組織診断にご協力戴いた愛知医科大学中央検査部林活次教授に感謝する。

文 献

- 1) 瀬木三雄他：医学のあゆみ、66：193—197, 1968.
- 2) 栗田英男：高令胃癌患者の医療態度、厚生 の指標、16：22—25, 1969.
- 3) 高松 脩他：若年者胃癌の臨床病理学的考察、癌の臨床、16：910—918, 1970.
- 4) 栗田英男：若年者胃癌の疫学、癌の臨床、18：461—465, 1972.
- 5) Lynch, H.T., et al.: Differential diagnosis of the cancer family syndrome. Surg. Gynec. Obst., 136: 221—224, 1973.
- 6) Warthin, A.S.: Heredity with reference to carcinoma as shown by the study of the cases examined in the pathological laboratory of the University of Michigan, 1895—1913. Arch. Intern. Med., 12: 546—555, 1913.
- 7) 森 昌明他：若年者早期胃癌患者を発端者とする癌多発家系。日内会誌、63：1444—1452, 1974.
- 8) 小林世美他：若年者胃癌の臨床。癌の臨床、18：389—392, 1972.
- 9) 上垣和郎：若年者胃癌について。癌の臨床、13：424—427, 1967.
- 10) 三好秋馬他：若年者胃癌。診療、24：169—176, 1971.
- 11) 坂本啓介他：胃癌における年齢、性因子について。外科、29：1570—1579, 1967.